

## 断章 (IX)

山中哲夫  
Tetsuo YAMANAKA

外国語教育講座

### CCXLI

陽性 (+) と陰性 (-)。プラスとマイナス。ポジとネガ。存在することと存在しないこと。MRI 検査でわたしの十二指腸は情報がまったく抜け落ちていて、その部分は真っ黒だった。再検査をしたが結果は同じだった。「写っていましたか」というわたしの問いに主治医は「写っていましたよ」と答えた。十二指腸は写っていたかという意味で聞いたのだが、主治医は黒い部分が写っていたという意味で「写っていましたよ」と答えたのだ、と気づくのに少し時間がかかった。医師にとって異常であることがポジティブなことであり、そこから彼の仕事が始まる。患者にとっては異常がないことこそがポジティブなことで、安心して自分の仕事に戻ることができる。なぜ血液検査で、ネガティブなはずの病気の可能性を示唆するものがポジティブとして表現されているのか、改めて分った。患者にとって存在してほしいもの、心理的にネガティブなもの、医学的にはポジティブなものであり、医師が活動を開始する契機となるもので、多少意地悪く言えば、そのことによって医師は心理的にもポジティブに変わるのである。治すことへの使命や生き甲斐がそこから生じるからである。この陽性反応と陰性反応の価値の交換は、生物学的な病気のみならず、精神病理的なものについても言えるだろう。ある陽性反応が、見方を変えれば、別の陰性反応のカムフラージュであったりする。

### CCXLII

フランソワーズ・ドルトの症例にある男の話が出てくる。彼はきわめて模範的な患者で、友好的態度でも進んで医師に話す。常にこやかで、帰るときには握手して別れる。しかしドルトはこの患者の陽性反応の裏側に隠された、医師にたいする陰性反応を見抜いている。握手したときの患者の掌がいつも汗でぬれていたからだ。彼の饒舌はあることを隠すための陽動作戦に他ならなかった。内心ではきわめて緊張し、医師にたいして瞬時も警戒心をゆるめていなかった。それほど見抜かれたくない、隠し通していたい秘密が彼にはあったわけである。あることを隠そうとすると、かえって暴露されてしまう。ついよけいなことを言っ

たり、よけいな行動を起したりしてしまうからである。もっとも巧みな隠し方は、隠さないことだ、とポオはその作品の中で語っているが、これはまた別の話かもしれない。

### CCXLIII

盲点は人の心の中にもある。目の前に危機が迫っているのに、相変わらず事態は平穏なままだと思いつむ。そこにはいくばくかの願望も反映されているだろう。愚かしいことだ。事態を直視せよ。誤魔化すこと勿れ。目の前に差し迫っていればいるほど、人はそれに目を向けようとしなくなる。隠されていないにもかかわらず、人はあえて心の中に盲点をこしらえ、見えないものとしてやり過ごそうとする。それでもいずれ終局はやってくるのに。

### CCXLIV

パリにいた頃、中野重治の詩の一節をよく思い出していた 《あなたは黒髪をむすんで / やさしい日本のきものを着ていた》(『別れ』) この言葉に激しい郷愁をおぼえた。哀しみもあった。しかしいま翻って考えてみれば、この郷愁や哀しみは、中野重治という人間そのものの郷愁と哀しみではなかったかと思われる。すぐれた抒情詩人であったし、不撓不屈の政治的作家でもあったが、彼のもっとも本源的なものは、この存在そのものがあたえる郷愁と哀切ではなからうか。対象を見据える距離感のある透徹した眼差しの中に、名状しがたい哀愁がある。これは彼の人間愛の証しに他ならない。二十一歳のときに書いた詩『大道の人々』にすでに中野重治のすべてが凝縮されている。流民のような大道芸人たちのまわりを吹きぬけるうそ寒い風、ここに彼の愛惜と忿怒(と抒情)が凝縮されている。

### CCXLV

『雨の降る品川駅』 《君らのくろい影は改札口をよぎる / 君らの白いモスノは歩廊の間にひるがえる》まるで目に見えるかのようだ。「御大典記念に」と副題がつき、友人の朝鮮人に捧げられたこの詩の重要な箇所は、周知の通り、伏字にされ、のちに削除された。日本国から追われてゆく朝鮮民族の運命を、愛

惜と忿怒（と抒情）で激越に表現したこの作品にも、同じ人間存在にたいする郷愁と哀切がある。色が変わるシグナルを冷静にみつめる目もある。しかし、伏字にされ、のちに削除された昭和天皇に関わる箇所にも、同じ郷愁と哀切が感じられる。『雨の降る品川駅』は遣り切れないほど悲しい詩である。追放される人々ももちろんだが、暗殺されようとしている昭和天皇も哀しい。うそ寒い風がここにも吹いている（中野重治は天皇制の犠牲となった天皇個人に深い同情を寄せていた）。

### CCXLVI

《お前は歌うな / お前は赤まの花やとんぼの羽根を歌うな / 風のささやきや女の髪の毛の匂いを歌うな / すべてのひよわなもの / すべてのうそうそとしたもの / すべての物憂げなものを撥き去れ》（『歌』）  
自分自身に向けられた言葉。これらのものをもっとも歌い上げたかったのは、他ならぬ彼自身であろう。歌い上げれば、誰よりも高い境地にまで舞い上がるだけの才能をもっていたらう。中野重治は自分の内なる歌声を扼殺して、時代を生きた。そうしなければ、彼自らの思想を貫くことができなかった。困難をきわめた時代を文学者として生き抜き通すためには、《すべてのひよわなもの / すべてのうそうそとしたもの / すべての物憂げなもの》を歌とともに抹殺しなければならなかった。中野重治は本質的に誰よりもロマンティックな詩人であった。

### CCXLVII

木下杢太郎はもっと評価されてよい文学者である。木下杢太郎が正当に評価されたとき、日本の文化水準はようやく欧米並みになる。

### CCXLVIII

明治四十五年（1910）に木下杢太郎はこう書いた 《マラルメの美（うるは）しき句章をトルストイは不可解と罵つた。なんとトルストイの一国（いつこく）さよな》杢太郎はフランスに滞在し、フランス語でマラルメを読み、凝縮されたその美しい詩句や散文を味読することができた。その意味では、少なくともこの点においては、彼はトルストイよりも上であった。明治四十五年に、これほどマラルメを理解し得た詩人がいたろうか。有明よりも、敏よりも、杢太郎がもっともマラルメに近いところにいた詩人ではなかったか、とわたしはひそかに思っている。

### CCXLIX

生きる希望と死ぬ覚悟。どちらも同じくらいに勇気がいる。

### CCL

北鎌倉の小林秀雄の墓に詣でる。江戸時代まで男子禁制の尼寺であったという、いかにもそれらしい優しい佇まいを見せる境内の奥に、ひととき静かな墓地があった。行きあたりばったり歩いていると、みどりに囲まれた小さな一角に気持のよい五輪塔があった。一番下の石は苔や野草にびっしり覆われて、方形の石が丸みを帯びて見えるほどであった。墓石の前に小さな水路があり、わずかに水が流れていた。それも気持よかった。傍に「小林家」と札が立っているだけで、他には何も無い。これが小林秀雄の墓に違いない、小林秀雄の墓はこうでなければならぬ、という気持がして、五輪塔の前で合掌した。感慨深く、なかなか立ち去りがたかった。立ち去るとき、墓石に生い茂った野草の、青い花を咲かせた一本を抜き取って、ノートにはさんだ。杉木立の奥の高いところで、杜鵑が鳴いていた。（あとで調べてみると、やはりそれは小林秀雄の墓であった）

### CCLI

東慶寺にはこの他にも多くの文人、文化人、画家、哲学者たちが眠っている。小林秀雄の墓と同じくらいに気持よかったのは、神西清の墓であった。人柄がそのまま墓石になっていた。岩波茂雄の墓は立派で、風格があり、まわりには見事な紅葉が枝を張っていた。もの書きよりも、ものを書かせるほうの墓が立派であることに、妙に納得した。

### CCLII

清岡卓行が亡くなったことを教え子から知らされる。その二、三日後、中村稔による追悼文が朝日朝刊に載った。「茫々たる思い」と彼は書いていた。「茫々たる思い」はわたしにもある。原口統三を通じて清岡卓行という名を知り、宮川淳を通じて『氷った焔』の存在を知った。美術評論の中で扱われたところに、清岡卓行の真骨頂がある。佐伯祐三や三岸好太郎にはさまれて、清岡の詩はさらに美しさを増しているように思われた。エリュアールのような優しい線で描かれた都会の愛と悲しみ。繊細この上ない言葉とリズム。しかしその底には暗い激情が凍結されている。冬の薬師寺東塔をある人は《凍れる音楽》と評したが、まさにそのようなものが彼の詩にはうかがえる。ともかく清岡卓行は最初から最後まで詩人であった。原口統三も宮川淳も清岡卓行も皆死んでしまった。

### CCLIII

十九のとき、はじめて買った詩集が現代詩文庫の『清岡卓行詩集』であった。わたしがはじめて読んだ現代詩人であった。年長の文学青年たちが鮎川信夫や田村

隆一を愛読していた頃に、わたしだけが清岡卓行を読んでいた。同年輩の友人たちは寺山修司に夢中であった。そして誰もがゴダールを論じていた。わたしだけが一人、密室で清岡卓行と向かい合っていた。フランス詩のもっともみずみずしい部分がそこにあると思われた。汚れなき、もっとも純正な詩の源泉がそこにあると感じられた。こういう深い印象をおぼえたのは、富永太郎と清岡卓行だけであった。

## CCLIV

《さはがしき世かな、些(ちと)の休(やすみ)を  
与へよ。せめて小さき万年青(おもと)のノ磁(じ)  
の卓(つく)の上に置けよ。》(木下杢太郎「C A R  
I C A T U R E」)このような形でオモトの美しさを  
表現した人をまだ知らない。

## CCLV

一方で、杢太郎は明治期にセロリの味と香を詩にしたモダンな人でもあった。

## CCLVI

十九歳から二十歳になる頃、ある人が東北の下宿屋に仮住まいしている知人に宛てて、つぎのような文章を書き送っている 《リルケの言葉に僕は一ヶ月の間揺ぶられ続けてみます おそらく、これから長い僕の一生を通じて忘れることの出来ぬ、稀有の事柄になることでせう。「……それにしても何故人間が人間同士の間で失ったものを、否、人間が与え得ないものを、物が与えてくれるのか、存在する喜びを、生への信頼を、愛を、何故に物に求めて行かなければならないのか……」この言葉の中には、二重の苦渋がある、双重的な苦しみがある。けれども、今僕はそのことについては触れまいと思ひます。この言葉から僕ははつきりと、amour(情愛)ではなく、charité(慈愛)こそ、僕に必要なのだと理解(わか)りました。

孤獨と愛とが、互ひに如何に深い関わりを持つてあるかを。その為には十全な物に對する信仰がなければならぬといふことも。それはまた、リルケの信心でもあつた。越智(保夫)の云ふとほり、それがリルケの「世界内面空間」だつた。僕にとつての「石の夢」とはこのことです。これは富永(太郎)の器物愛でもあり、アンデルセンの童話の世界でもあるのです。「何処にもあつて何処にもない世界の夢」とノヴァーリスが云ふ時、その何処にもあつて何処にもない世界の夢とは、たゞ単なる「理想郷」などと云ふものでは更々なくて、物の世界、もつと正確に云ふならば物の故郷の世界といふ謂なのです。さうでなければ、あの一種怖ろしい非人間的な、出来得る限り自然に近づこうとし乍ら、そのことによつて完膚なきまでに人工的になつてゆく、不思議なアンデ

ルセンの童話世界は現はれては来ません。僕は、本當に愛 charitéといふこと、孤獨といふこと、信仰といふこと、そして神といふことが理解(わか)りかけて来てゐます。少なくともそれを考へることの資格は得たと信じます。ドストエフスキのあの大地への接吻が理解(わか)りかけて来てゐます。一生にたんとある経験ではありません。》彼はそのときから三十六年後の現在まで、基本的にはほとんど変わっていない。因みに「石の夢」とは、ミロのヴィーナスを讃えたボードレールの詩の冒頭にある言葉である。

## CCLVII

政治的 nominalisme。ある現象を「ナチズム」(国家社会主義)と呼べば殆どすべての人が拒否反応を示すだろう。しかし同じ現象を、あるいは現象は違ついても本質的に同じものを、「純然たるパトリオチズム」と呼び、逆にまた「一種のグローバリズム」と呼べば、人は必ずしも拒否反応を示すとは限らない。「侵略」を「防衛」と言い換えるのと大差ない。呼び方一つで、反応が変わるのだ。軍人や政治家はこの種のすぐれた策略家である。

## CCLVIII

自分はいつか死ぬのだということを忘れていた。最後はこんな小さな壺に入るのか……。割り箸で頭を潰されて……。そして最後に喉仏を入れられて。目に見えるようだ。

## CCLIX

原口統三がランボオではなく、マラルメを読んでいたら、あるいは自殺はしなかったかもしれない。ランボオは文学を捨てた。文学でしか生きられない人間は途方に暮れる。最後にうっちゃりを食わされたようなものだ。あるいは、文学そのものと化して、ランボオの花嫁になった自分が、花婿のランボオに捨てられたようなものだ。いや、これはヴェルレーヌの場合か。マラルメは虚無を発見してもなお生きていた。すべては滅び去つても、文学だけは残ると言い切った詩人である。マラルメの人生に対する無関心と空虚感は、むしろ彼の文学の拠り所とさえなっている。マラルメを読んでいたら、原口統三は死なないですんだように思われる。ランボオは爆発である。自己破壊以外に何も無い。文学までも破壊してしまつた。もっとも、それゆえに、彼はマラルメよりもランボオに惹かれたのかもしれないが。

## CCLX

原口統三は『二十歳のエチュード』を残して自殺した。やはり最後まで文学を信じていたのだと思う。そ

うでなければ、自殺する人間が、どうしてあれほどまでに、自分の文章を推敲しようとするだろうか。彼の自殺の原因を正確に言い当てることは誰にもできないが、彼が悪夢に襲われてたびたび口にしようとした怖ろしい、と友人が洩らしたそれらの言葉が、いったいどんなものであったか、それが分れば、自殺の動機の一部を推察することができるように思われる。

#### CCLXI

自殺は、いかなるものであれ、残された者たちに大きな影響を及ぼす。多感な思春期にある者は、いっそうつよくその影響を受ける。寮生活者同士であれば、さらにその影響力はつよい。自殺しようとする者が、周囲にそのことを洩らしている場合は、それ以上の計り知れない影響力を及ぼす。取り残された者たちは、「罪責感」に打ちのめされてしまう。彼を殺してしまったという「罪責感」と、自分らは生きていくという「罪責感」。この二つの負い目を背負って生きていかなければならない。あとに残された者たちへの、このような重大な結果を考えると、とても自殺する気持にはなれない。

#### CCLXII

身もふたもない話 『二十歳のエチュード』の最後の言葉で告白しているように、原口統三は意地になって死んだ。惜しいことだ。彼の自殺を思いとどまらせることができたのは、ただ一人。それは、清岡卓行でも母親でもない。幼い頃から対立してきた父親である。父親が彼の前で頭を垂れ、謝罪し、二人が泣いて赦し合うことができたなら、彼の人生は一変していたろう。『天外脱走』と『海に眠る日』は不在の父親への思慕と忍従する母親への哀憐の情に溢れている。おそらく、父親は家族を愛さず、母親は長兄を愛していたろう。末っ子統三は（見かけとは裏腹に）誰からも愛されていないと思われる。カトリシズムやニーチェへのこだわりはその表われである。彼が周囲の親しい人たちに優しくした、ということもまた。彼の死後、父親があとを追うように死んでいったのは、象徴的な出来事である。

#### CCLXIII

原口統三は忘れ得ぬ青春群像のひとつである。あたかも自分もその青春の現場に立ち会っているかのような、そんな錯覚をあたえる稀有な存在である。いや、原口統三は存在ではなく、現象と言うべきか。これは第二、第三の原口統三を生み出す。すべて似て非なるものだ。自分を真似て死ぬことの愚を、彼は軽蔑をこめて語っている。しかしながら、青春のある時期、しかもあのような混乱期に、「死ぬこと」が「生きること」であったのは仕方ないことでもあろう。「原口統

三の死」が自分の自殺のよい口実となった若者がどれほどいたろうか。

#### CCLXIV

日常的な死 『東京物語』のラスト・シーン。焼玉エンジンの音を響かせて港を離れてゆく漁船。画面中央をゆっくり横切ってゆく。映画が終わろうとするそのとき、手前の家並の間を、路線バスが漁船とは逆方向に走ってゆくのが見えた。一瞬のことだが、わたしはドキリとした。刃を喉元に当てられたような、ひやりとした気持ちになった。一瞬のバスの出現は、やがておまえも死ぬのだ、と港の光景をながめている笠に向かって（そして観客に向かって）、語りかけているように思われた。『東京物語』は老夫婦の一方の死によって終わるのではない。このあとも日常的にくり返される死の暗示によって終わるのである。形見の腕時計がその象徴となっている。時間は流れ、くり返され、人は生き、そして死ぬ（バスの出現がなければ、この画面は完結した典型的なラスト・シーンとして、老妻の死と残された老夫のこれからの余生だけを際立たせるものとなっていたろう）。

#### CCLXV

島木健作。田舎の光の匂いがする作家。彼の文章は野の草の動きを感じさせる。晩年は死を描いた作家と言われたが、小動物の死を通して、迫りくる自らの死を暗示したというより、むしろ、自然界の生命のすばらしさと運命の法則を表わした作家と言うべきだろう。ここに不吉の影は微塵もない。生命の衰弱はまったく感じられない。人間を描くときより、自然を描くときの方が、筆致は澄み切っている。

#### CCLXVI

『恋愛と西洋』を書いたドニ・ド・ルージュモンも、その書を批判したサルトルも、精神分析については同じような誤解を示している。『手帖』で幾度も精神分析を槍玉にあげたサン＝テグジュペリも、断片的な知識だけでこれを批判している。精神分析の文学研究への応用という点で高い評価を得たシャルル・モーロンのマラルメ研究ですら、厳密な意味では精神分析とは呼べないものである。ユングではなくフロイトが、真に根付くにはまだまだ時間がかかるだろう。特に日本で精神分析が正当な市民権を得るには（とりわけ文学研究の分野で）絶望的な努力と時間が必要である。誰しも、自分が長年抱いてきた夢が、無残にも打ち砕かれるのを見るのは、たまらないだろうから。

#### CCLXVII

上田敏の訳で有名なヴェルレーヌの『秋の歌』は、彼がまだ二十歳のときに書いた詩で、従姉エリザの死

も、のちに妻となるマチルドやランボオとの出会いも体験していない頃のものである。この詩から彼の人生を読み取ろうとするのは早計だろう。ある詩を読んで、そこに詩人の生活や境涯を探ろうとするのは、詩を読む姿勢としては正しくない。ましてや、その生活や境涯から詩を解釈するのは邪道である(精神分析だけは例外だが)。『秋の歌』は甘い歌である。あそこに歌われた悲嘆や物憂さはフィクションにすぎない。そのようなフィクションを必要とした、ヴェルレーヌの宿命的な暗さは、これは否定できないが、それでもあの詩は、ただ音の響きだけで成り立っているようなものである(上田敏はそれをうまく日本語の音に移し替えた)。山部赤人や山上憶良の為人や生涯を知らなくても、われわれは彼らの歌を味わうことはできる。ユトリロやモジリアニが酒を飲まず幸福な生涯を送ったとしても、彼らの絵の価値は変わらない。悲惨な生活が必ずしも名作を生むとはかぎらない。悲惨な生活を送りながら凡作しかものすることができなかった詩人や画家をわたしは何人も知っている。

### CCLXVIII

吉田健一が小林秀雄についてこのように語っているのを聞いて、まったく同感した。彼は言う 小林秀雄は当たり前のことを当たり前と言っただけで、決して人の意表に出たわけではない、正常なことを説く正常な精神の持ち主だ、そのように彼を評した批評をいままで聞いたことがない、と。われわれはもう一度、彼を読み直す必要があるだろう。批評の神様に祭り上げなくともよい、またシニカルに貶めることもない、正当な位置に彼を返してやるべきだろう。

### CCLXIX

パリ植物園内に恐竜博物館があり、巨大な恐竜の骨格とともに、さまざまな動物の骨格があり、さらにア

ルコール漬けの動物の胎児も陳列されていて、その中には人間の畸形胎児もある。頭が二つのもの、目が一つのもの、二つの胴体が繋がったもの、それらが他の動物の胎児とともに並べてある。ヨーロッパ人の科学精神を目の当たりにする思いだったが、このときわたしは文学における「自然主義」が「科学主義」であったということをはじめて理解した。ゾラの「自然主義」とはこのような眼を持ち、科学者のように分析することなのだ。パリという都市は一個の人体のように解剖され、二つの家系の種族は実験台の上に乗せられ、遺伝子がかけ合わされる。日本の自然主義とはなんという違いだろう。日本に見られたような本能主義的小説や私小説めいたものは、そこからは決して生まれぬ。彼らの眼は冷徹で、思考はあくまで理知的で、文章は渴いていて、感傷や感懐の入り込む隙間もない。日本画と銅版画の違いと言ったらよいだろうか。対象との間にある空気の透明度が決定的に違うのだ。

### CCLXX

マラルメはゾラの小説を評して「ひとりでに頁がめくられる」と言った。人生が流れてゆくように、小説の頁がめくられる。神なき空だけが、この人生を見下ろしている。それを読者が読む。と言うより、読まされる。いつの間にか読者も非人称の存在と化して、この現場に立ち会わされる。否応なしに。ゾラにはそれだけの文章力があつた。文体の速さとダイナミズムがあつた。冷徹な科学の眼を持っていたからこそである。象徴派詩人がゾラの小説の非人称性を見抜いていたことを面白いと思った。象徴詩派と自然主義文学の領袖二人は、この点において、たがいに手を握り合っていたわけである。このことは、二人の間に交わされた数多くの親密な手紙を読めばすぐに分ることである。

(平成19年8月27日受理)

